あの戦争を語り継ぐ 平和都市宣言30周年記念連載⑦

山本　茂さん　94歳
堀込地区在住

兵歴

私は兵庫県出身で、昭和17年4月に兵役検査に合格し、翌18年11月に姫路46部隊に入隊、厳しい初年兵教育を耐え、姫路よりフィリピンに向かいました。

現地では武器が不足しており、敵から奪った小銃が渡されました。私は第100師団（通称拠兵団）司令部の衛兵隊として、ミンダナオ島ダバオ市に到着しました。その後兵団経理部に転属しました。

昭和20年4月、ついに米軍が上陸し、敵の近代兵器の攻撃に後退するのが精いっぱいでした。ダバオ最大の山であるアポ山中深く入り、日の光も入らぬジャングルの中を必死に司令部の後を追いました。食糧がなく、途中の道筋には衰弱した兵が横たわっていましたが、どうすることもできませんでした。

バッシャオという谷間の小さい土地が司令部の最後の場所でした。米軍もここまでは追いませんでした。いよいよ食糧がなくなり、木の芽など毒さえなければ口にしました。上からの命令で各自塩を竹筒に詰め背嚢（はいのう）につけて行動しました。飢えを少しでもしのぐことができ、塩の大切さを知りました。一般部隊の兵士は一応戦死となっていますが、餓死者が多く出ています。

7月半ばには、各自食を求めバッシャオを離れました。道中原住民の集落にたどり着くと、一夜の宿と食糧を頼みました。お礼に大さじ一杯の塩をあげると、山中では塩は何よりの貴重品だったようでとても喜ばれました。これ以上行かれぬというところで集落の原住民と生活を共にしました。9月、敗戦の知らせがあり「山を下りよ」との連絡がありました。帰路10日間の食糧は原住民に用意してもらい、途中まで送ってもらいました。登って来た道を下りていきましたが、いたるところに弱っていた兵士はそのまま骨になっており、悲惨を感じました。

問　企画政策課男女共同参画室
内線３３５４

※体験談を募集しています。